

雲仙岳・火碎流

恐れていた大規模火碎流でついに三十人を超す犠牲者がでてしまった。緑豊かな田園風景を一瞬のうちに、灰色の世界に塗り変えた火碎流のすさまじさが、テレビ映像を通して生々しく直接お茶の間に飛び込んできた。

火口から噴出した高温のガスや火山灰、軽石が一団となって山腹をナダレのように這い降りる現象で、数百度の熱雲が時速百キロを超す猛スピードで爆風のように吹き抜けた。火碎流は火山災害で最も危険なものであると実感できた。

一九〇一年のモン・ブレ火山の山頂溶岩ドームの崩壊による大火碎流は麓のサン・ピエル市をわずか三分で全滅させ二万八千人の命を奪った。日本では一七八三年の浅間山の天明大噴火の時の鎌原火碎流では泥流を引き起し一、三〇〇人が犠牲となり、一九二六年の十勝岳の火碎流は雪を溶かし泥水流の危険が高いので油断は禁物である。となつて富良野の街を襲い、一四六人の死者

をだした。

もともとマグマは岩石がドロドロに溶けたものだが、意外にも中味の五割から九割もの量のガスや水が高圧で閉じ込められる。それらが噴火とともに爆発的に噴出しするよう、火山灰とともに噴火とともにラムネの栓を抜いたように、さまざまに噴煙となる。とくに雲仙・普賢岳の場合は溶岩が粘りつこいので噴火と火碎流の規模を予知するのはきわめて困難である。

以前、イタリアのポンペイの遺跡を訪れたことがあるが、一瞬のうちに熱雲で古代都市を壊滅させたベスピオス火山ははるかに遠く、ポンペイの悲劇をまのあたりに見た印象と、どうしても結びつかなかった。自然はしばしば人知の想像をはるか超えた現象をぶつけてくる。自然が相手故にの予知予測は手強く怖い。

長崎県は長崎豪雨、諫早豪雨で知られた日本有数の集中豪雨の常習地帯があるので、これから本格的な梅雨を迎えると、大量の火山灰が積もつてるので、火碎流とともに大規模土石流の危険が高いので油断は禁物である。

(気象庁。村松 照男)